

40歳で始めた新たな挑戦 私が描くキャリアデザイン

熊本地震から4年3カ月が経過した昨年7月、熊本県は「令和2年7月豪雨」という再度の自然災害に見舞われた。私は6年間の知事公室勤務で、地震と豪雨の2つの激甚災害を経験したが、その度に全国各地からの応援 関係者の御支援のありがたさを痛感した。この場をお借りして皆様に感謝を申し上げます。

公務員人生の転機

2004年4月に熊本県庁に入庁した私は、熊本土木事務所、健康福祉政策課、人事課人材研修センター、水俣病保健課、そして知事公室と、これまで5つの職場で勤務させていただいた。

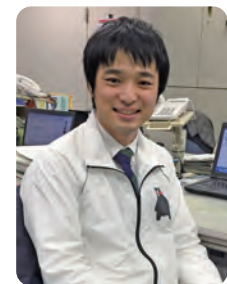
公務員の世界に分野を超えた異動は付き物だが、自身のキャリアを大きく変えるきっかけとなったのが、平成22～24年度に在籍した3か所目の「人事課人材研修セン

ター」である。この異動に合わせ、早稲田大学マニフェスト研究所人材マネジメント部会（以下、「人材マネジメント部会」という）への派遣という機会に恵まれ、通算1年、5回にわたる研究会に参加させていただくことになった。

「人材マネジメント部会」とは、人材育成や組織変革を「一人称」で学ぶ場であり、「他の誰でもない、あなたが、熊本県庁を変えするために何をやるの？」という問いに対し、「私」はこうする」ということを、自らが起こすアクションを通して証明していく場であった。1年間にわたるまさに「入門」の中で、自分が描いていた公務員像、守備範囲はすべて覆され、アップデートされていた。

自治体経営シミュレーションゲームの開発

その中でも、大きな変化となったのが、2010年に30歳で立ち上げた自主活動



熊本県知事公室付主幹
和田 大志

〔わだ・たいし〕1980年熊本県生まれ。2004年熊本県入庁。2015年に知事公室勤務となり、熊本地震と令和2年7月豪雨の2つの災害を経験。漫画『ONE PIECE』と連携した復興プロジェクトを担当。今春から東京大学公共政策大学院にて自治体経営シミュレーションゲームの研究開発に取り組む。

グループ「くまもとSMILEネット」である。前述の「人材マネジメント部会」をきっかけに立ち上げた同世代の同僚との自主活動であり、自分たち職員が「笑顔」になれる職場づくりを行うことで、県民にも「笑顔」を届けようという「ES（従業員満足度・Employee Satisfactionの略）」の考えを実践するグループである。

10人のメンバーでスタートし、20代～40代まで最大40人のメンバーと活動した。公務員のやりがいや次の世代に伝えたいもの、思いで制作した「採用PRムービー」は今も熊本県庁の公式HPに掲載されており、仕事始めのモチベーションアップに始めた「ハイタッチ」で職員の登庁をお出迎えするプロジェクトはYahoo!トップにも掲載された。自主活動グループがYahoo!トップを飾ったのは全国初ではないだろうか。

こうした取り組みの中でも全国的な評価を受けたのが、2030年の自治体経営を



>>> 私のキャリアデザイン



【写真上】「SIM熊本2030」のルールについてレクチャー

【写真下】「マニフェスト大賞」で「SIM熊本2030」についてプレゼンした

シミュレーションする対話型のテーブルゲーム「SIMULATION 熊本2030（以下、「SIM熊本2030」という）」である。

5〜6人が仮想の市の幹部職員となつて、迫りくる未来の課題に対して政策判断し、まちの姿を決めていくゲームであり、開発から5年経った2018年末時点で、44都道府県で開催され、64種類のご当地シナリオが作成されるまでに拡大した。

ゲームの内容は、是非実際に体験して感じ取っていただきたいが、右肩下がりの財政状況で歳出予算は縮小し、税収は減少。公共インフラの更新リスクは高まる状況において、都市部・過疎部双方に生じている課題に対し、幹部（部長）であるあなたは、どのような政策判断（予算配分）を行いますか？ と決断を迫るゲームである。

ありがたいことに、2014年には熊本大学公共政策コンペで「熊本県知事賞」を、2017年にはマニフェスト大賞で「最優秀

コミュニケーション戦略賞」を受賞し、多くの方にこのゲームの魅力を感じていただくことができた。

昨今のコロナ禍への対応としても、逆境の中からチャンスを見出す進化が始まっており、地方自治体のデータ活用やデータに基づく施策展開を支援する「一般社団法人オープン&ビッグデータ活用・地方創生推進機構（VLED）」の研修プログラムでは、ZoomとGoogleスプレッドシートを活用してすべてオンラインで行うスタイルが確立されている。こうした進化が開発から7年が経った今でも起こっていることを、開発者の1人として大変嬉しく感じている。

未来経験の「予約」

活動開始から10年、メンバーの役割や生活環境が変わってきたことから、40歳になるのを一つの節目に「くまもとSMILEネット」の活動を終了することにした。

30代を捧げたこの活動の中では反省すべき点も多々あるが、通常の業務では得難い経験ができ、「リーダー」としての覚悟や忍耐、組織運営の難しさなど、本来であれば数年先にしか味わえない「未来経験」を得ることができたのが、一番の財産である。

振り返ってみて、自身のキャリアを描く上で、こうした「未来経験」を意図的に組み込むこと、つまりは、自らに「予約」しておくことは、大変重要だと感じている。

「一言」が人生を変える

一方で、本業である17年間の県職員生活で忘れられない仕事として、知事公室時代に担当させていただいた漫画『ONE PIECE』と連携した復興プロジェクトがある。

2016年に発生した熊本地震からの復興のために、熊本県出身の作者・尾田栄一郎先生と株式会社集英社の皆様が協力してくださったもので、主人公のルフィをはじめ、その仲間である「麦わらの一味」の銅像を設置し、被災した地域の復興を後押しするものである。このプロジェクトの担当になったのも、まさに巡り合わせであり、一歩踏み出して声にした「一言」がきっかけとなった。

2018年4月、尾田栄一郎先生の漫画家としての偉大な功績と復興支援の御尽力を称え、県民栄誉賞を贈呈することが決定し、担当課が当日お渡しする賞状の文面を推敲していた。しかし、中身を見てみると、いわゆる「フォーマット」に忠実な文面であり、これでは熊本県の感謝が伝わりにくいと感じた。そこで、「私、ONE PIECEが大好きですから、考えてみまじょうか」と思い切って文面の修正を提案したのだ。

この一言が、その後の公務員人生を大きく変えることになる。賞状の文面は定型的な文章ではなく、「あなたの作品『ONE PIECE』の友情と驚きに満ちた冒険の物語は、その物語のように海を渡り、多くの人に



熊本県庁前の並木道に設置されたルフィ像と共に
©尾田栄一郎/集英社

愛されるとともに「〜」で始まる「世界に1枚だけの特別な賞状」に変わっていったのだ。

贈呈後も、熊本県庁の「ONE PIECE」担当として、県民栄誉賞の記念である「ルフィ像」の設置、さらには被災した各地へのルフィの仲間の像8体の設置も任せていただき、震度7の地震に2度見舞われた熊本に明るいニュースを届けることができた。

数ある復興の取組みの中でも、「ヒノ国復興編」と銘打った「ONE PIECE」熊本復興プロジェクトが、麦わらの一味の銅像とともに50年後、100年後まで語り継がれていくことを考えると、子どもたちに自慢する一生涯の仕事ができたと感じている。

キャリアビジョンの要諦 〜駒感覚から指し手感覚へ

では、本稿の主題である「キャリアビジョン」について話をしたい。未来のありたい姿から考える「バックキャストイング」という言葉をご存じの方も多いと思うが、キャリアビジョンの要諦は、「未来は誰かが作ってくれ」という将棋の「駒感覚」から脱却し、自分が動かしていくものだという「指し手感覚」を養うこと」に尽きるのではないだろうか。先に述べた2030年の自治体経営をシミュレーションする対話型テーブルゲーム「SIM熊本2030」も同じことで、プログラム最後に、その場限りで積み重ねてきた政策判断がいかに不完全なものであったかを振り返っていただいている。本来、

実現したかった未来があるのであれば、事前にその姿をメンバーと思い描くこと、「バックキャストイング」の重要性を認識していただくのだ。

また、「くまもとSMILEネット」の立ち上げから活動終了までの経験で学んだことも同様で、どんなキャリアを描きたいかを考え、具体的な行動論の一つとして、今後必要となる「未来体験」を意識的に組み込むことの有効性を述べさせていただいた。

「意識的に考え、無意識に動く」

漫画『ONE PIECE』との復興プロジェクトで体験したことはどうだろうか。「私が考えてみましょうか?」と発した一言がすべての起点となり、その後の未来を大きく変えていったのだ。決して、すべてを見越して発した言葉ではなかったが、未来は自分の行動一つ、言葉一つで形作ることができる」と体感した出来事であった。

これらの経験から感じたことは、未来を見越して、体験を「予約」することでも変わるし、その場の判断で発する「一言」でも変わるといふことである。目の前に迫り来る「二項対立」の選択肢の前に、私たちはよく、どちらかしか選択できないものだと捉えてしまうことが多いのではないだろうか。しかし、実際には、その両方が重要であったり、組み合わせることが解決に結びつくこともある。

私が経験したこの2つの出来事は、いずれも大切な分岐点であり、ベストなキャリアづくりにつながった。言うならば、「意識的に考え、無意識に行動」した結果である。

結果は後付け

ただ、面白いのは、こうしたキャリア選択の良し悪しは、必ず後からでしか分からないということだ。そして、良かったと思える選択ほど後から実感が湧くものである。「他人と過去は変えられない。変えることができるのは、自分と未来だけ」という言葉がある。「自分」を変えることで「他人」の行動変容を促し、「未来」を目指す姿に変えていくという考え方に異論はない。

しかし、最近思うのは「過去」も変えることができるのではないかということだ。ここでいう「過去」とは、出来事そのものではなく、自分のキャリアや体験の「意味づけ」のことである。

「未来は創ることができる」という感覚で臨みつつも、過去の自分に対しての「意味づけ」を行うというサイクルを回し続けていくことで、私たちのキャリアビジョンは、それぞれに輝き、独自の意味を有していく。亡き父の言葉で心に残っているのは、「仕事は好きになったもん勝ちだもんな」という言葉である。1つ目の意味は、おそろしく「好きこそもの上手なれ」ということだろう。そして、2つ目の意味は「好きな



>>> 私のキャリアデザイン

ものであれば、どんな局面でも楽しむことができ、結果、人生も楽しむことができる」ということではないかと、本稿を執筆している中で感じたところである。

新たなチャレンジ 大学院進学

そしてこの春、私はまた新たな経験を「予約」し、次のチャレンジを行う決断をした。熊本県庁からの派遣として、東京大学公共政策大学院に進学するという道である。

この道を決断した一番の理由は、私自身が次のチャレンジとして、先述の「S I M 熊本2030」の新バージョン開発や若者の政治参加への活用など、突き詰めたいテーマに出会うことができたからだ。

具体的には、ゲームの設定や時間配分をよりシンプルにし、学校の授業でも使ってもらえるように改良することだ。「S I M 熊本2030」を体験した若者が、その後どういった投票行動、政治参加を行ったかも調査したいと考えている。私たちが未来を創っていくためには、どのような未来が迫り来るかを予測することが重要であり、その上で、これからの未来を担う若者と一緒に社会のあり方を考えていくようなスキームを作り上げることが重要だと確信しているからだ。

もう一つの狙いは、体験した若者が生まれ育った地域のことを改めて見つめ直し、進学や就職、結婚や子育てのキャリア選択

の時に「あの時、みんなで真剣にまちづくりを議論した経験」がフラッシュバックし、地域の担い手として戻ってみようかな、と思うきっかけになることを期待している。

この「S I M 熊本2030」で行う挑戦は、その一翼を担うことができる確信しているし、学び直すチャンスをくださった知事はじめ熊本県にすっかりと恩返しができるようにしたい。今回の新たなチャレンジが、私のこれからの人生や仕事にどのような変化をもたらすのか不安もあるが、それ以上の楽しみもある。計画した日々の中で起こる事象に、無意識に反応し、後日、どのようなキャリアを築くことができたのか、楽しみに答え合わせをしたいと思う。

私の仕事論

「私にとって仕事とは」という問いを、特に学生の皆さんに聞かれた時には「笑顔を創り出していくことです」と答えている。仕事選びは「誰の笑顔を創っていききたいか」、職場選びは「それを誰と一緒に創っていききたいか」であると思っている。

最近では、就職や転職などキャリア選択の参考となる情報やネットワークに簡単にアクセスできるようになった。SNSやオンラインサロンがその代表格であり、私も株式会社ホルグ（代表・加藤年紀氏）が主催する地方公務員限定のオンラインサロンに加入している。そのホルグが毎年実施してい

る「地方公務員が本当にすごい！」と思う地方公務員アワード」では、全国各地の素晴らしい人材が表彰され、独立したり、それぞれの組織で活躍されている方が多い。

私自身も、ありがたいことに2017年に表彰していただいたが、正直な話として、公務員を辞めようと思ったことは一度もない。なぜなら、公務員は自然災害を受けた辛い時も、住みやすさランキングに入るような順風満帆な時も、住民の「笑顔」を守るやりがいのある仕事だと確信しているからだ。

そして、おせっかいにも「予算」と「権限（法律・条令等）」を持って、まちの課題のコンサルティングに入ったり、プロデューサーとしてまちのビジョンを語り、実現できるポジションにある。課題解決する「フィールド」も、そのための予算や権限といった「資源」もすべて有している仕事があるだろうか。そう考えると、60歳まであと20年、65歳定年ならあと25年もあるが、これから先の期間も楽しみは尽きない。

最後に、私を突き動かす言葉を一つ紹介して本稿を閉じたい。人材マネジメント部会で幹事に教えてもらったメッセージで、『リーダーシップの旅』（野田智義・金井壽宏 著／光文社新書）で紹介された「Lead the self, Lead the people, Lead the society」という一文だ。この言葉のように、自分自身をリードし、周囲をリードし、社会をありたい姿にリードする「旅」を続けていきたい。